
WILD ADAPTER - one ' s life span -

勝月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W I L D A D A P T E R - o n e ' s l i f e s p a
n - -

【Nコード】

N 4 8 9 7 D

【作者名】

勝月

【あらすじ】

ある日の夕方、「バイト」を済ませて帰宅途中の久保田誠人と時任稔。コンビニで店員と揉めている小学生を見かけた久保田は……
……。 W I L D A D A P T E R の久保田と時任の、とある日常の物語です。

第一話

每秒 每秒 今現在も 命は当たり前前に消えていく

救いの声も安堵の吐息も 幸でも不幸でも関係ない

静かに滅ぶ 全ての命が……

繁華街の雑踏に流されながら、時任稔は軽く伸びをした。そのまま、ビルの隙間から小さくのぞく、朱色の空を見上げる。

「久保ちゃん、今何時？」

隣を歩く相棒、久保田誠人くぼたまことにたずねると、間延びした独特の口調で答えが返ってきた。

「んー、五時三一分三二秒」

「どおりで腹減ると思った」

「相手さん、来るの遅かったからね」

いつものバイトの帰り、同じ場所で一時間近く立ちっ放しだった足が痛む。今日は古い壺を届ける仕事で、壺の中には重い鉄の塊が入っていた。無論、堂々と持ち歩ける代物ではない。

緊張感無さすぎんじゃねーの？

そう時任はむくれたが、彼ら二人にしても最初から持ち合わせのないモノだ。それを他人にだけ求めるのはどうか、と、久保田はつぶやいたものだった。

「カレーはやあつつつと食い尽くしたし、外で何か食って帰ろうぜ」

「そうねえ。時任は何食べたい」

「えっとオレは……」

わくわくと周囲の店に視線を泳がせる時任。まるで、ご飯前のネコのようなと久保田は思った。

時任はネコっぽい。これは彼に出会った人々が等しく感じる第一印象であり、その後も変わらないイメージだ。天下無敵のワガママで俺様な性格だが、なぜか憎めない。

容姿の方は、黙っていれば本人が豪語するほどではないにしろ、美少年と呼べる。着慣れたパーカーにジーンズというラフな格好でいてなお、それは損なわれるものではなかった。

ただ、右手にはめた黒い革手袋だけが、さり気ない違和感を持って目立つ。

対して久保田は、時任より頭一つは高いひよろりとした長身の、一見だらしない男である。面倒臭げに、やや伸びたまま放置され

た黒い髪。その髪の下で分厚いメガネを使用しているため、目元ははっきりとせず、顔の印象はぼやけている。

服装にしても、手元のシャツを適当に羽織っているだけ、という風だった。

温厚そうなクセにどこか世慣れた雰囲気も、年齢に似合わず老成して見せていた。

対照的でしつくりくるコンビ。それが彼らをセットで見た時の感想かもしれない。

二人は立ち止まった。目の前に、肌寒い季節を忘れそうな、露出度の高い少女が二人、立ちはだかったからだ。

少女たちはストレートの黒い髪をしていたが、これは校則を遵守しているわけでも、自分の好みに従っているのでもなく、流行だからだ。

脳みそが溶けて外に出きったような表情で、薄っぺらく赤い唇を歪めて開いた。

「ねえねえ、もし暇だったらあ、私たちと、どっか遊び行かない？」

「夕飯食べてえ、カラオケでもいいしい」

「はあ？」

甘ったるい声がうざったい。軽薄な少女たちの逆ナンパに、時任は間の抜けた声を上げた。

臭いだけで鼻に付く、柑橘系の香水がまとわりつく。それがますます、飲食店に全神経を注いでいた彼を不機嫌にさせる。時任は眉間にシワを寄せて、むっつりと短く言った。

「行かない」

「え、何でえ」

「いいじゃん行こうよお」

「俺たちは今から帰るとこなの。じゃあな」

「だったら暇なんじゃない。どうせなら遊ぼうよ」

「うるせえな。俺は、え………!?!」

突然、久保田が時任の肩に手を回して、軽く抱き寄せる。咄嗟の事で、素直に体を傾けた時任の頭の上、久保田が少女たちをじつと見た。

ぶ厚いメガネの向こうの瞳に、少女達は思わず見とれた。意外にも、かなりかつこ良い男なのではないかと。

そんな彼女達に気付いているのかいないのか、久保田が軽く言うてのけたは、彼女達の期待にも予想にも沿わない言葉だった。

「悪いね。俺たちことう関係なの」

「は？ 久保ちゃん何っ」

「だから、夜は長いようで非常に短いんだよね。そこんとこ、分かってくる?」

「ちよつと久保ちゃ……………」

「てことで、他、当たって」

と、そのまま久保田は歩き出した。自然、時任も少女たちを背にする。呆気を取られていた少女たちは、二人の背中に向かって、同時に歓声を上げた。

ウソウソ、本物? えーアタシ初めて見たあ。うわ、もったいなあ。

なぜか明るくはしゃぐ少女たち。

時任は久保田が体を放す頃になって、ようやく言葉を発した。

「久保ちゃん、今の、何」

「お前、ああいうの苦手でしょ。助け舟、出したんだけど」

「ていうか、何でそっち系のネタなんだよ」

「手っ取り早いしね」

「そついう問題か」

さらりと言つてのける久保田に、がっくり肩を落とす。

どこか純粹な、生まれたての子猫のような精神を持つ時任と違い、久保田は本当に世慣れていた。掴み所のない態度で、何事も簡単にあしらってしまうのだ。

今の一件で、すっかり気の削がれた時任の目に、コンビニが映った。

「弁当食いたい。あとアイス」

「あ、タバコの買い置ききれてたんだわ」

店内に入ると、愛想は良いが心のこもっていない店員の挨拶が飛んできた。最近のコンビニは、床を鏡のように輝かせることに力を入れる。とは、先日見たテレビの知識だ。ここも例外ではない。天井の光りを見事に反射している明るい店内に、タイミング良く弁当類が並べられた後らしく、選び放題だった。

久保田の持つカゴの中に、洋食幕の内やのり弁、若鶏のから揚げやたこ焼きに餃子などが次々放り込まれる。ついでポテトチップスの大きな袋。

「と、アイス」

先ほどの不機嫌はもう消えてしまったらしく、時任は上機嫌でお気に入りアイスを手を取った。甘さ控えめの高級バニラアイスだ。

「久保ちゃんの、それ何？」

「ん？ きな粉プリン」

「きな粉？」

久保田の大きな手にのった小さなカップを覗き込む。

「もちもちした食感をお楽しみ下さい。って、プリンがもちもちしてて旨いのかよ」

「新発売だって」

と、謎のプリンをカゴに入れる。

「ええっ食うの」

「興味わくでしょ」

「そうかあ？」

時任が疑わしげな声を上げるのも無理はない。久保田はコンビニデザートなどの新発売は大抵試すのだが、時任には理解しがたいものも多い。一口食べて後悔したことも少なくないのだ。

飲料水のコーナーで、ペットボトルの炭酸類とお茶を選び、二人はレジへ向かった。二つあるレジのうち、一つは休止中で、残りは小学一年生くらいの少年と、そう若くはない女性店員がもめていた。聞こえてくる話だと、少年の手持ちの金では弁当二つ分に足りないらしい。

「でも、これで買わないとダメって言われてて」

「足りないって、お母さんに言っておいで。そう何回も後でって」
とには出来ないから」

「でも……」

少年はなにやら必死な様子で続けようとするが、店員は久保田と時任に気付いてにつこりと微笑んだ。少年の相手をやめるのに、ちようど良かったのだらう。

「ごっぞ」

と、言われてカゴを少年の目の前に置く。少年は、泣きそうというより悲壮な表情でうつむいた。よれよれのトレーナーの襟元は伸びきり、久保田の目線からは少年の頼りなく細い首筋と、背中の一部が見えた。

久保田は財布を取り出した。

「あーすいません。あとセブンスター2カートンと、この子のお弁当二つ、下さい」

「は？ え、お客様？」

店員の女性は困惑気味に、久保田と弁当と少年を忙しく見比べた。少年も驚いて顔を上げる。

長身の久保田を見上げる少年は、ひどく痩せていた。大きく愛らしいはずの瞳は落ち窪み、ただ怯えた色だけが濃く浮き出ている。

「おごったげる」

「い、いい、いいです」

ギリギリ聞こえる範囲の、小さな声を残して、少年は店を飛び出した。少年の後姿を目で追いかけたまま、久保田は時任に財布を押し付ける。

「会計、お願い」

「え、久保ちゃん」

理由を聞く間も止める間もなく、久保田はコンビニから出て行ってしまった。

時任はますます困惑する店員の顔を見て、財布を開いた。

「とりあえずそれ、全部頂戴」

「お客様、あの子のお知り合いですか」

「初対面。さっきの、いつつも金足りないわけ？」

「はあ、どうも親がお金をちゃんと持って来させない時があるみたいで。一応足りない分はあとで母親が持ってくるんですけど、そう毎回後でってわけにはいかないですから」

時任が責めている訳でもないのに、店員は言い訳じみた話し方をした。店員の立場などは時任に関係ない。今は久保田が追いかけたことが重要だった。

店員に会計を促すと、時任は重い荷物を両手に店を出た。

第二話

コンビニにいる間に、あたりはすっかり暗くなっていた。初夏から随分経って、紅葉を待つ季節らしく、日が落ちるのが早い。そんな青暗い空に抵抗して、街灯が地面を照らしている。

久保田の追いかけた少年は、さらに暗い小道沿いの古い木造アパートへ駆け込んだ。少年は久保田が後ろにいたことに、全く気付かなかったようだ。

久保田はアパートの前の電信柱に寄りかかり、ポケットの中でクシャクシャにつぶれている、タバコの箱を取り出した。あと三本。何気なく残りを数えて、口に啜えた一本に火を点けた。

少年の自宅は一階の端だ。細い目をそこに向け、肺に送った煙を吐き出す。

予想していた事は、そう待たされずに始まった。

少年の家からヒステリックな母親の怒鳴り声が響いた。何か高い物音がして、間を置かずに少年の泣き声が聞こえた。悲鳴、だった。

「あらら、やっぱりね」

おもむろに少年の家の前に立つと、久保田はドアを強くノックした。

「すみませ〜ん」

久保田の気配に驚いたのか、母親の声が止んだ。少年も声を潜めたか口をふさがれたかで、静かになった。もう一度呼びかけると、ほどなくドアが開いた。チェーンをかけたまま、わずかな隙間から結構美人の若い女性が、久保田を訝しげに見た。

「どちら様」

少年を怒鳴る、甲高くヒステリックな声とは正反対に、低めで陰気な小声だ。

「お弁当、お宅のお子さんが忘れて行ったんで」

「……………あなた、店員？」

「通りすぎりです」

「お金は足りなくて買えなかったって言ってますから」

母親は愛想なく言つとドアを閉めた。閉めたとたんにもた怒鳴る。

他人様に迷惑をかけるんじゃない！ 何度言ったら分かるの。

母親の言い分は、そのままご近所の彼女への言い分になりそうだった。

その後が続いて、男の声がした。

うるせえよ。静かにしろっつってんだろ。

荒っぽく唸る口調と少年の叫び声とくれば、中に入らずとも状況

が見えてくる。

久保田は携帯電話で110番を押した。アパートの住所と表札の名前と用件を伝えて切る。

「今通報したから、もうすぐ警察の皆さんが来ますよ」

間延びした、緊張感に欠けるいつもの話し方だったが、中に呼びかけてやると、今度はドアチェーンをはずして若い男が出てきた。というより、若すぎる。まだ高校生か大学生といったところだろう。久保田と変わらない年頃だ。母親はどう見ても三十前後なので、十歳ほど歳の差があるはずだ。

男は久保田を睨みつけた。

「通報だ？ 関係ねえだろ。俺たちが何したってんだよ」

「児童虐待でしょ。この場合」

家の中で、少年が畳の上に転がっているのが見えた。ひどく泣きじゃくっている。

「しつげだよ、しつげ。他人が口出すことじゃねえよ」

「そう？ 最近はそうでもないんじゃない？」

「とにかく関係ねえよ。警察連れて帰ってくれ」

ボキャブラリーが少ないねえ。

口の中で呟くと、久保田は男が閉めようとしたドアを片手で掴んだ。

「何してんだよ！」

この男も流行愛好者らしい。キレやすい若者の代表として、久保田に殴りかかってきた。短絡的思考が生んだ突然の攻撃に、常人なら一発でKOされたかもしれない。それほど、加減というものがない。

だが、今日は相手が悪かった。

余裕で必殺の拳をかわされ、男は姿勢を派手に崩した。崩しついでに、差し出された久保田の足に素直に引っ掛かり、顔から地面へと倒れこむ。

「こ、このやろっ」

男は痛む顔を押さえながら、自分の指越しに久保田を見上げた。街灯のかすかな光りが、久保田のメガネに反射した。毒付こうとして男は口を開けた。はずだった。

「………あ？」

アパート前の、小道と交差している細い一方通行の道を、窮屈そうに乗用車が走ってきた。そのライトに久保田の顔が照らされ、その両目を男は見た。

男はびくりと体を震わせた。全身から冷たい汗が噴き出していくのが分かる。先ほどまでの凶悪な気分はすでに逃げ去っている。

圧倒的な、恐怖。

久保田は、ただこちらを見ているだけだ。ナイフや拳銃を持っているわけでもなく、顔にヤクザっぽい傷があるわけでもない。レンズの向こうの細い瞳が、彼を見下しているだけなのだ。

(何だ。何だよ、こいつ)

少しでも動いたら殺される。そんな確信がある。

自分がただの石ころのような気分になった。久保田の瞳に映る自分が、そう見えた。

間違えた。善良そうな連中や、自分に従う女と幼い少年だけを相手にしていれば良かったのだ。彼が現れた時点で気付くべきだった。歯向かわなければ、見たこともない深く虚ろな闇の深淵を覗かずにすんだはずだ。自分はただの高校生なのだから。

その時だった。両手に重い荷物を抱えた時任の姿が、久保田の視界に入った。正確には、その気配が。

時任へ振り返る久保田は、いつものぼんやりした表情に戻っていた。

「久保ちゃん」

「時任、その人逃がさないでね」

「分かった」

何が分かったのか、久保田は時任にそれ以上何も言わなかった。すっかり硬直した男を、荷物を脇に置いた時任が腕を掴んで立ち上がらせた。もちろん、背中であじり上げてやる。

久保田は母親へとゆっくり歩み寄った。気圧されたのか、母親は玄関口から一步家の中へ後退した。そんな二人の間に少年が駆けて来た。

「お、お母さんに、痛いこと、しないで」

相変わらず怯えた大きな目には涙が浮かんでいたが、小さな体で必死に母親を庇っている。震える声も力強かった。

久保田は口元をゆるめた。

「痛い事なんてしないよ」

彼の細い瞳は、母親の腕の包帯や、長い前髪で隠している紫色の痣を見ていた。

アパートや近所の住人が、外の騒ぎに顔をのぞかせ始めると、近くを巡回中だった警官が二名、連絡を受けてようやく到着した。

最終話

事件を担当した刑事が久保田に頭を下げた。事情聴取からようやく解放された久保田は、空いている部屋で一人待っていた時任に声をかけた。

時任は待ちくたびれて呻いた。

「おっせえよ。もう腹へって死にそう」

「ごめんね。でもポテトチップス全部食べたんじゃないの？ しかもビッグサイズ」

「食ったけど、あんなんじゃないや食った気しねーよ」

「んーじゃ、帰ろっか」

お詫びの印に、コンビニの袋を全部久保田が持った。

警察署を出て時計を確かめると、八時をとっくに過ぎていた。人通りは少ないが車の多い道路沿いを歩き、帰途に着く。

途中コンビニを見つけた時任が、寄っていくことを提案した。

「アイス溶けたから買って帰ろうぜ」

事情も分からないのに刑事の質問に答えていた時任である。事情聴取自体はごく短時間ですんだとはいえ、アイスが溶ける方が早かった。

新たにポテトチップスとバニラアイス、久保田は先ほど買わなかった白ごまプリンも購入した。

久保田のマンションに着くと弁当類を温めて、予定外に遅くなった夕食をとる。虐待を受けていた少年に渡し損ねた弁当は、冷蔵庫の中に入れておいた。

時任の用意した二つのマグカップに、ペットボトルのウーロン茶を久保田が注ぐと、まるで何も食べていなかった野良猫のように、勢い良く時任はがつがつと食べた。ここ四日ほどカレーばかりを食べていたせいもあり、コンビ二弁当さえおいしく感じる。

腹が落ち着いた時任は、テレビのリモコンを手にした。チャンネルを順番に回していると、ニュース番組で児童虐待について話していた。二人が関わった事件ではないが、最近この手のニュースは頻繁に目にする。

「久保ちゃんは何で虐待されてるって気付いたんだ？」

「あの子の襟元からね、痣、見えてたし」

くわえて、怯えた瞳としぐさ。古く汚れた服。栄養失調で痩せた体。意識して見ていれば、想像を必要としない姿だ。

「それにしても、あの母親も自分の子供にあんなひでーこと、よくやるよな。信じらんね」

「あの高校生に捨てられなくなかったんだって。高校生の方も、子供が懐かないとかで、ウルサイって殴ってたわけ。ま、よくある話

ね

「最悪。そんな事で壊れる関係なら、そもそも続くわけねえのに」

「母親より女だったってことだね。あのヒトは」

と、久保田は一瞬にも満たない間、自分にとってのその存在が脳裏をかすめたことに、眉をひそめた。

「あんな最低な親でも、あのガキンちよ、久保ちゃんから庇ってたじゃん。……なんか、スゴイよな」

「自分の母親があ的高校生に殴られてるのも、見てきただろうからね。子供にとっては、母親が世界の中心。普通は他の世界を知らないから捨てられない」

「近所の連中も気付かなかったのかよ」

「関わりたくないんでしょ。恨まれても嫌だし」

「毎日泣き声だの叫び声聞くよりやよっほどマシじゃん？」

「今時、無力な一般人は避けるものなんだよ」

道端で犬が死んでいようと、ネコがぐったりと倒れていようと、マイナスの臭気から避けて通りたいのが人だ。眉をしかめ、涙を流し、同情するくらいが精一杯だろう。

「ああ、そっぴやあいつ、小一くらいだっと思ってたけど、小三なんだってな。これからあいつ、どうなるんだろ」

「親とはしばらく会えないし、施設に行って、心のケアとかしてもらうでしょ」

それが幸せかと聞かれれば頷けない。

虐待を受けた子供の心の傷は、大人になっても癒えるのは難しい。忘れたように見えて、何かの拍子で思い出してしまふ。もし将来、幸せな家庭を持っても、自分の子供を虐待する可能性も高い。

虐待は連鎖する。

久保田がそんなことを考えていると、時任が冷蔵庫を開けていた。

「デザート食うだろ」

自分のアイスのカップと久保田のきなこプリンを出して笑う。久保田は自分には無関係な思考を止めて、新発売のプリンに興味を移した。

きなこプリンには黒蜜の小袋が付いていて、薄いベージュ色のプリンにかけて食べると書いていたが、久保田はまずそのまま食べてみる。もちもちした食感が売りのプリンは、コンビニで買ったデザート用の小さなスプーンに抵抗して、なかなかさし込めない。とはいっても、所詮はプリン。すぐに一口分をすくい上げた。

ソファに並んで座っている時任が、その様子を見ていた。久保田はスプーンを時任の口元に差し出した。

「食べる？」

「ん」

開いた口の中に入れてやると、時任は微妙な表情になる。

「なんかぼやっとしてて、味あんましない」

「本当だ。じゃ、黒蜜かけてみようかな」

「げ、それぜってーまずい」

久保田は小袋を切って、スプーンに載った一口分にかけて。それをまた時任に食べさせる。

案の定、今度はかなり嫌な顔をした。

「まずっ。黒蜜つけたとたんにマズすぎっ」

「そう？ イケると思うんだけど」

「ウソ。もう絶対いらない」

と、時任は自分のアイスで口直しをしている。

その間にテレビのニュースは殺人事件の話題へ移っていた。

時任は、ふと思いついたように言う。

「あのガキんちょ、死ななくて良かったよな。死んだら全部終わりだけど、生きてりゃいろいろチャンスあるし」

確定した明日はない。

時任の純粹すぎるほど素直な意見は、時に久保田の何かを激しく刺激する。久保田は他の誰にも向けない瞳で時任を見つめた。

いつもの独特な話し方で応える。

「そうだね。明日は白ごまプリン、試せるし？」

「うげえ、まだ食うのかよ」

うんざりして時任はゲーム機の電源を入れた。気分転換をするつもりなのだろう。久保田は明日のゴミ出しを賭けた格闘ゲームの勝負を受ける。

生きていればチャンスがある。

そうだろう。自分でさえ時任と出会うチャンスがあった。

たとえそれが、幸せな結果にならなかったとしても。

毎秒 毎秒 飽きもせず 命は生まれる

神様の都合も 人間の希望も 要・不要に関係なく

ただ、生きて死ぬ日のために

o n e , s l i f e s p a n) (E N D) (

あとがき

こんにちは、または、はじめまして、かじき勝月です。

ここまで読んでいただいた方、本当におおきに、ありがとうございます。

今回は、「WILD ADAPTER」という大好きな漫画の、大好きなキャラクター二人の日常を描かせていただきました。

ファンの皆様、なんかこんなですいません……。

実は私、漫画やアニメ、小説などなどの二次創作を書くのが苦手なのです。

読むのは全然OKなんですけどね。

上手く書けなくて挫折するというか。

なのに、ふと今回の話を思いついて、なんだかスラスラと書いてしまった珍しい小説になりました。

どっちかという時任ファンなのですが、読者として読んでも視点が久保田よりな私は、なんとなく久保田が主人公っぽい話の方が書きやすいようです。

試しにこれ書いた当時、続けて時任視点で書こうとしたら、挫折し

ました。

しかしこの話、展開的にはそう面白いものでもなく、なんとなく彼らにとっては小さい事件が日常であっただけの、淡々とした話になっちゃいましたね。

あの世界に合ってるといえば合ってるんですが。

原作のイメージを考えると、もう少し久保田と時任がらぶらぶでも良かったですかね？

そういえば、この話を書いた当時、今回久保田が食べてたデザートを本当に食べましたね。

私の感想は、時任と同じです……。

もちもちした食感は、プリンにはいりません！みたいな。

なんとか味みたいなのが苦手なので、案の定ダメでした。

でも久保田は案外平気な気がして。

どっかで読んだ何かの味の好みが、やっぱり時任よりだった私は、逆に久保田ならこういうの平気なイメージあるんですね。

今回一応、原作を知らない人でもなんとなく、暇つぶし程度に読めるように心がけてみたのですが、上手くいきましたかね？？

某所で友人相手に公開した時は、原作に興味を持っていただけなのですが、やはり二次創作するかぎりには、原作に興味を持ってもらえたらファンとしては嬉しいのです。

もう本当、物凄くかつこいいですからねえ。

読んで損はないって感じで。

まーちよいBLよりですが、ほとんど気にならないと思うので。

心理描写とか、すごく良いので面白いです。

今回は何をUPしよう。

ほとんど何も決まってるませんね。

なんとなく薄暗い小説を二つもUPしたので、甘くてふわふわな少女漫画っぽい恋愛小説をUPしたい気もします。

ただ、まだ全然話数が足りてないんで、もうちよい書き上げてからになりそうですが。

またUPしているのを見かけることができましたら、時間が余った、とてもお暇な時にでも、のぞいてみてくださいませ。

では、ここまでお付き合いありがとうございました。

2008/01/22 友情のためにKAT-TUN勉強してた
ら、すっかり関ジャニを好きになってた大阪人すぎる勝月。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897d/>

WILD ADAPTER - one ' s life span -

2010年12月9日05時54分発行